The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『文反古』の版下筆者
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	上方文藝研究. 2008, 5, p. 54-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47708
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『文反古』の版下筆者

飯倉洋一

文化五年に刊行された秋成の消息文集『文反古』の版下筆者は、従来、小沢蘆庵門人で秋成の歌文集『藤簍冊子』編者の昇道であるとされてきた（「解題」『上田秋成全集』第十巻、中央公論社、一九九一年）。しかし、正しくは松本柳斎である。本稿ではそのことを明らかにしたい。

一　『僉載』と『藤簍冊子』

『藤簍冊子』の「附言」は昇道の書いたものである。「この附言がもし昇道の手になるとすれば、本書（藤簍冊子＝飯倉注）の版下も彼の手になるものと見なされる」という、前掲『上田秋成全集』の「解題」は、『藤簍冊子』の版面を一覧すれば首肯されるが、ここでは、別の方法で『藤簍冊子』の版下が昇道筆であることを確認しておきたい。

それは昇道筆写にかかる「剣の舞」と、『藤簍冊子』所収「剣の舞」の筆跡を比較するという方法である。昇道筆写にかかる「剣の舞」は、『僉載』という昇道収集の和文アンソロジーに収められている。『僉載』については小澤蘆庵研究家の中野稽雪がはじめてその存在を明らかにし（「真仁法親王と小澤蘆庵」『洛味』二二〇号、一九七一年一月のち『小沢蘆庵の真面目』私家版、一九八五年所収）、鈴木よね子「『藤簍冊子』の成立と編集」（『近世文藝』六九号、一九九九年）および「昇道筆写本「劔の舞」「月の末邊」翻刻」（『都大論究』三七号、二〇〇〇年）によってその概要が紹介された。鈴木の『都大論究』稿においては「剣の舞」「月の前」の秋成和文の部分が翻刻され、一部写真掲載もされた。また同じ時期に、昇道研究家の田坂英俊も、『枕雲上人の和歌』（私家版、一九九九年）に『僉載』の内容を詳しく紹介している。『僉載』は現在京都市の中野義雄氏が所蔵する。筆者は中野氏の御好意により『僉載』の原本を実見することが出来た。鈴木・田坂稿と重複するが、必要最低限の情報を掲げることにする。

『僉載』は半紙本（縦二二・六糎、横一六・二糎）二冊の写本。薄縹色布目表紙。表紙左肩にそれぞれ「僉載」と朱書されるが、これは本文とは別筆。小口にはこれも本文とは別筆で「僉載丙」「僉載丁」と書かれている。もともと「僉載甲」「僉載乙」とともに四冊あったうちの、二冊であろうと推察される。丙冊は四十六丁。「古文粋」という内題および尾題がある。「古文粋」とは古文の抜粋の意であるが、跋文によれば山岡明阿編『文の栞』（安永七年刊）からの抜書であると知られる。さて、跋末に、

寛政六甲寅年秋はづきふつかの日、まがねふくきびのしりへのみちなる、さみきだう平の城のかりのやどりにてしるす。

とある（句読点・濁点は飯倉が施した。以下も同様である）。「きび」は「吉備」、「さみ」は「沙弥」、「きだう」は「熙道」の字を充てるべきである。熙道は昇道の別号の一つ。昇道は吉備府中明浄寺の出身で寛政六年時は京都に在住している。つまり筆写者は昇道であることがここから確定する。

丁冊には、題はない。見返しに貼紙があり、「芦庵門　熙道筆　備後府中明浄院僧　別名昇道又間斎　上田餘斎朋友　藤箕冊子上刻助縁」と記される。四十六丁のうち、十六丁分が契沖・長流らの和文の抜書で、「右契仲（ママ）文章一長流文章八夢歌一首頓阿文章二小澤翁難波の入江まさよしより来るをうつしおかれしをかりてうつせるなり甲寅九月尽の日」と識語がある。それに続いて『拾玉集』の今様歌四首が一丁、さらに秋成の『剣の舞』『月の前』二編の写しがある。『拾玉集』以後の筆写時期は寛政六年以後としか言えず、鈴木の主張のように『剣の舞』『月の前』の成立年次を従来の寛政十一年から数年遡らせることができるかどうかは、慎重に考えなければならないだろうが、それはさておき、この秋成和文の写しの手を、『藤箕冊子』版下の手と比べてみるとどうであろうか。

図1　『僉載』所載「剣の舞」冒頭（中野義雄氏蔵）

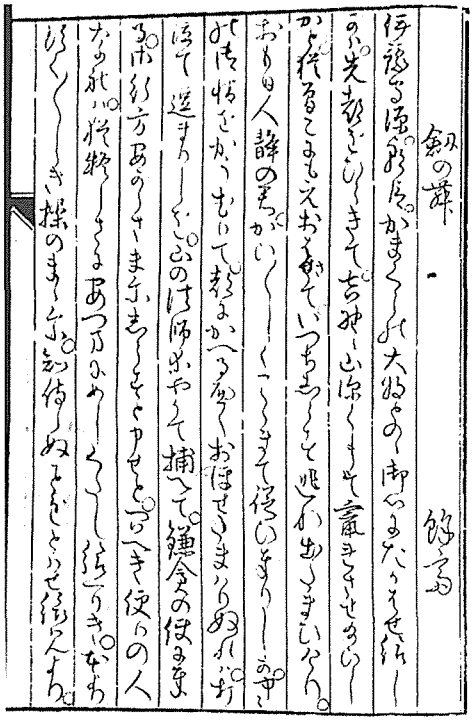


図2　『藤箕冊子』所載「剣の舞」冒頭（天理大学附属天理図書館蔵）

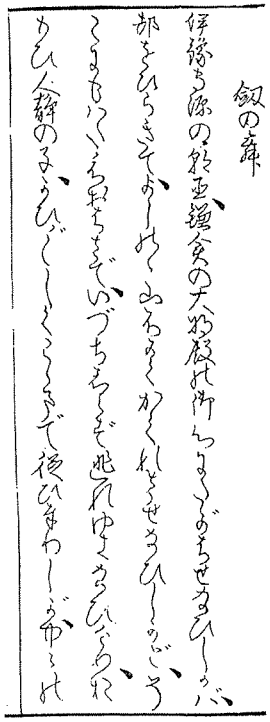


図1、図2を比較すれば、筆跡は酷似しており、これにより『藤簍冊子』の版下は昇道筆であると断定してよいだろう。

二　昇道筆秋成消息文と『文反古』

では『文反古』はどうなのか。『藤簍冊子』と『文反古』の版下の筆跡は同じようには見えない。しかしそれをよりはっきりと示すには、『僉載』のような、『文反古』の本文を昇道が筆写したものの存在が必要である。まさにそれに相当する文献が存在する。

それは昇道筆の半紙本全二十五丁の写本（架蔵）である。本書は熊谷武至旧蔵本で、熊谷武至『續々歌集解題餘談』（一九六八年）の「四九、昇道文献傍註　その一」にも触れられている。前半十三丁が八編の消息文、後半十二丁が十五番歌合の本文である。この本については別途報告を予定しているが、ここでは必要な事項のみ挙げておく。

本書は一筆であり、その筆者は昇道であると考えられる。後半の歌合は、中扉に「享和三年亥四月十二日升庵当座十五番歌合」という内題があり、同跋文に、「月ごとのつどひに題をさぐり、歌よまんずるもあまりにおなじやうのことなれば、こたび愚亭の会には歌あはせゝんとて、布淑のうしにこふて題をさだめしめしは月の朔日なり（中略）昇道しるす」と記している（傍線飯倉、以下も同じ）。升庵とは、田坂英俊氏にその複写を提供していただいた明浄寺過去帳に、

興仁院了詮法師
当山十世主了然嫡男文化八辛
未年三月十一日京於岡崎升庵逝
一代大業当山口興後世莫忽

とあって、昇道の岡崎での庵号であることがわかる。ちなみに了詮は昇道の名である。「愚亭」が「升庵」であり、「昇道しるす」とあれば、後半の撰者は昇道であり、筆跡も昇道自筆として問題はない。一方前半の八編の消息文集は、そのうち四編（一、二、六、八）が既に知られる秋成の消息文と小異はあるが同内容である。残りの四編も内容を検討すれば、すべて秋成の消息としてよい。つまりこれは、秋成の著作としては新出のものである（この点については二〇〇八年十一月十一日、佐賀大学における日本近世文学会秋季大会で「昇道筆秋成消息文集について」と題して発表した。その詳細な報告は別稿を期す）。

さて、秋成消息文集に収められる八編のうち、その冒頭の一編は、「十時学士におくる」と題されるものであり、これが刊本『文反古』にも同じ内容が見出される唯一の消息なのである。二、六、八の三編は、『文反古』の草稿的存在である天理大学附属天理図書館所蔵の『文反古稿（仮題）』に同内容のものが見出されるが、刊本には収められなかったものである。「十時学士におくる」に対応する消息は、『文反古』上の終わりから二番目の手紙で「故さとに、月をわたりて在ほど、十時梅厓におくる」と題されている。したがって、両者の筆跡を比較すれば、従来言われているように、『文反古』の版下筆者が昇道であるか否かが、判断しやすいはずである。次に掲げるのがその比較である（図3、図4）。

図3 『昇道筆秋成消息文集』「十時学士におくる」（架蔵）

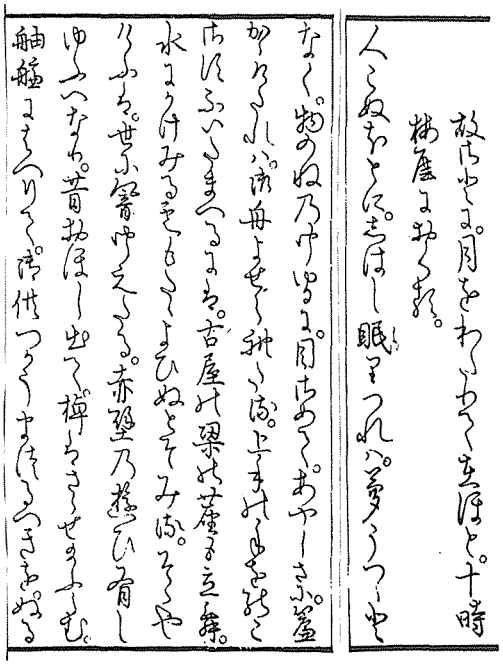


図4 『文反古』上、十時梅厓宛消息（大阪府立中之島図書館蔵）

これをみれば、「ぬ」「る」「て」などの筆跡に明らかなように、両者は別筆であると断定せざるを得ない。では、誰が『文反古』の版下筆者であるのか。

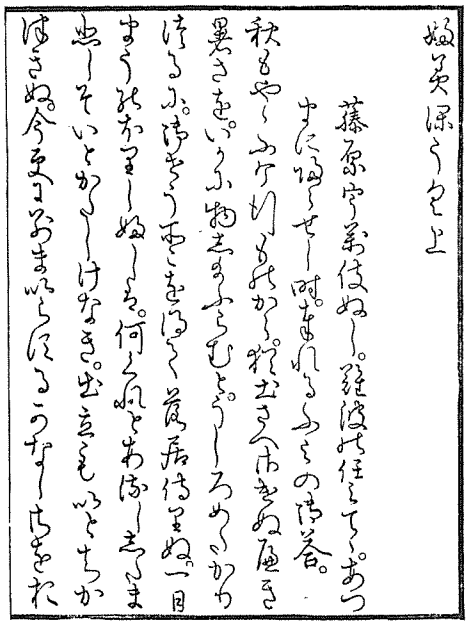
三　松本柳斎の自筆日記と『文反古』

先述した学会発表の準備中に、私は『文反古』の版下が昇道ではないと判断し、昇道について研究されていた鈴木よね子氏や、昇道が出た明浄寺と縁のある岡山県府中市慶照寺の昇道研究家田坂英俊氏にお考えを伺ったところ、ご両人とも昇道の版下ではないだろうというご見解であった。

とくに田坂氏は、本文の筆跡は跋文の筆跡と同じだから跋者の松本柳斎が本文の版下も書いたということになるだろうとの考えを私信で示された。これは目から鱗というべき指摘であった。たしかに、版下筆者が昇道であるという従来の通説がなければ、誰でもまずそう考えるところだろう。なぜなら大沢清規の序文の版下筆跡は、本文版下とは異なるが、松本柳斎の跋文の版下筆跡は、本文筆跡と同じだからである（次頁図5・図6）。本論文はこの田坂氏のご教示に従ったものであり、その功の大半は田坂氏に帰するものである。

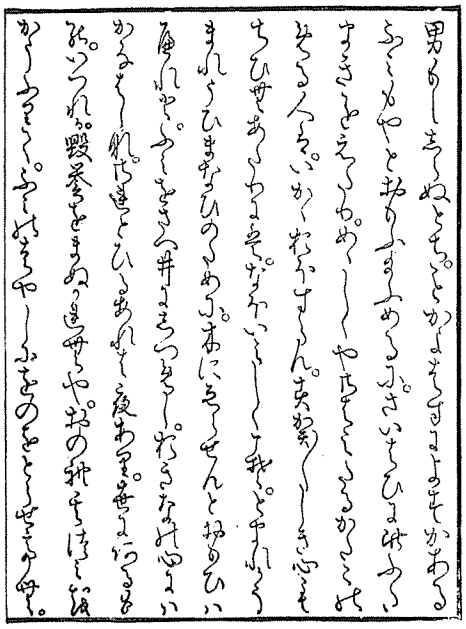
それにしても学会発表時には、『文反古』の版下筆者が松本柳斎であると断ずることはできなかった。なぜならその時点で、柳斎自筆資料として見たのは、新日吉神宮所蔵の短冊帖に収まる二枚の短冊だけで、柳斎の編著とされる『山家集類題』等も柳斎自筆か否かが明確ではなかったからである。しかし、学会発表時に私は柳斎の自筆資料について書かれた重要な論文を失念していた。

図5



『文反古』上　本文冒頭部分（大阪府立中之島図書館蔵）

図6



『文反古』松本柳斎跋文の前半部分（同右）

長島弘明「秋成と松本柳斎」（『日本文学』二〇〇六年十月号）である。長島はこの論文の中で中村幸彦旧蔵、松本柳斎自筆紀行の『雪之不流道・心能友』を紹介し、この中に秋成の『文反古』下に収められた柳斎との往復書簡が、推敲前の形で載っていることを指摘した。その推敲のありさまについては、別途考察したことがある（「開かれたテクストへ―刊本『文反古』への変容―」『テクストの生成と変容』二〇〇五―二〇〇七年度大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論講座共同研究 研究成果報告書、二〇〇八年三月）。ここでは長島論文では掲載されていなかった影印をあげ（次頁図7）柳斎の筆跡と刊本『文反古』の筆跡（次頁図8）とを比較してみよう。

「忘貝」「も」「ち」などの文字の特徴が酷似しており、同一筆跡と判断して問題なかろう。かくして『文反古』の版下筆者は松本柳斎であることは確実だと結論される。

ではそのことが持つ意味とは何か。『文反古』の成立には、さまざまな人物が関わっている。大沢清規・松本柳斎・昇道・森川竹窓・斉収法師らが確実に関与した形跡があり、彼らは『文反古』の中にも登場している。しかし従来、その中心にいたのは、『藤簍冊子』と同じく昇道ではないかと考えられてきた。だが本稿で明らかにしたように、版下筆者が松本柳斎であるとすれば、跋文を書いていることや、前述の往復書簡のみならず、秋成の自分宛ての書簡を下の巻軸に置いた柳斎こそが、『文反古』編集の中心にいたと考えることがきわめて自然になる。

京都書林仲間記録『板待御赦免書目』（宗政五十緒・若林正治編『近世京都出版資料』日本古書通信社、一九六五年所収）の文化五年分の記録に「文反古輯者柳斎　二冊」と記されているのは、そのことを証す

図7　『雪之不流道』より秋成宛松本柳斎消息（頭欄は秋成消息）

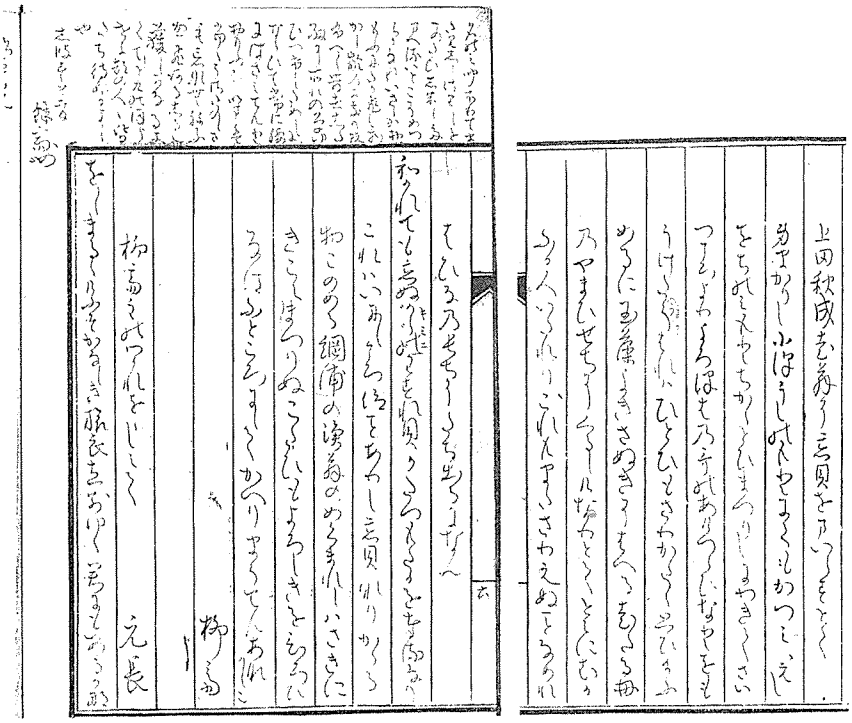
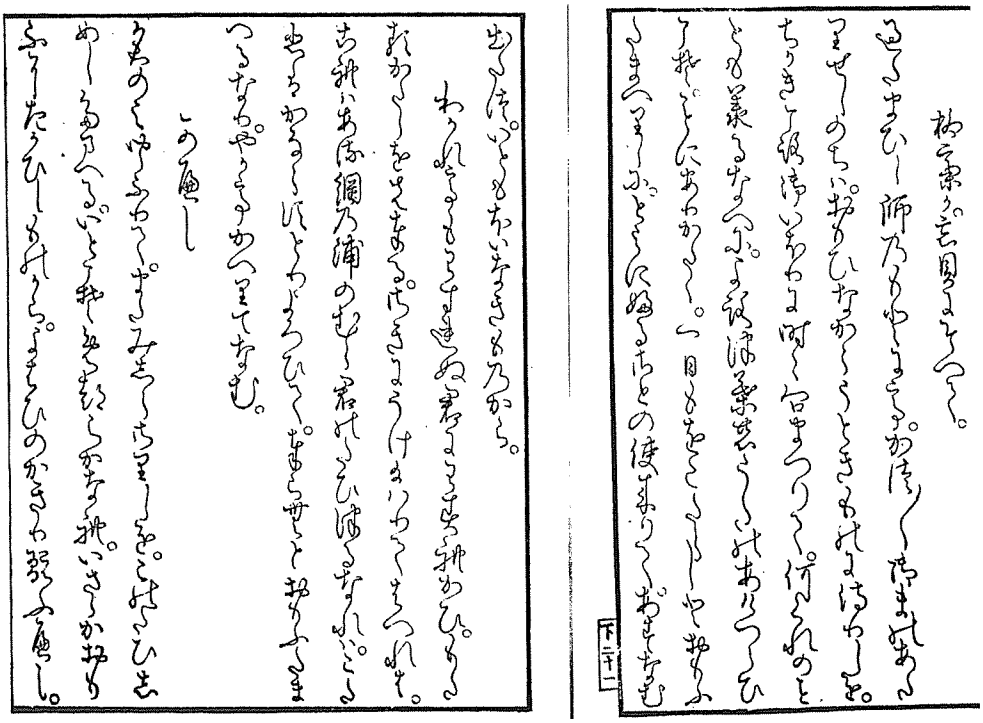


図8　『文反古』下所収　秋成宛松本柳斎消息（大阪府立中之島図書館蔵）



るものである。

【付記】

御所蔵の『僉載』閲覧をお許し下った中野義雄氏に深謝申し上げる。

中村幸彦氏旧蔵『雪之不流道・心能友』については、関西大学図書館・青木晃氏・長島弘明氏にご教示を得たが、原本を閲覧することができなかった。中村幸彦氏の娘婿である青木氏によれば、関西大学図書館で未整理の状態になっているようである。そのため、ここでは長島弘明氏のご好意によって提供していただいた原本の複写に拠った。

関係文献の閲覧に関わるご配慮をいただいたり、貴重な御教示を賜った、鈴木よね子氏・田坂英俊氏・長島弘明氏・藤島嘉子氏・山本卓氏、および大阪府立中之島図書館・関西大学図書館・天理大学附属天理図書館・明浄寺の諸機関に厚く御礼申し上げる。

資料の掲載をご許可いただいた青木晃氏・中野義雄氏・大阪府立中之島図書館・天理大学附属天理図書館に深謝申し上げる。

（いいくら　よういち・大阪大学教授）